



石門

心學道話

二篇
中

9
3895
5



門 9
號 3895
卷 5

前席之續



良家のそれかて死の海嶺の境にあらうとて又ある秋の田
喜も積られれば名成成しむる悪も積られれば才成しむる
取びとやうのやうゆでもこの積るといふやうに玉極恐し
そのでござりまん。これ三十三回書の本本よるのりり
石松れ帆推よなるやうな大本でも。まよめうららのやうな
たふふよのいでいたふ。こい尻揚校はよふさふさ芽生さ
あつとけまど夫の生れまが志ぶなくははりうくく。
あの中うか大本にたつこのや。まてその伸るのと音款を
たりうんはあて居ても今あれほどなううのりりといふ

早稲田 大學 図書館
27.6.16 受
藏 書

大さか紙がむして何と... 平者親は... 不若が漸く... 此水よと... 不返事や不請教... 縁は我も... 流りゆくて親... 其の... 情なる...

か... 出来ませぬ... 親れあ... 其君と... 此者漸美... 本と末... 友の... 名が... 又その...

うち親もむいへはさうと又いひくと長松が。あやりのま
 しく老人が。かしくといへる。おのりうらで隣の二鳥とんや
 し申を親も。是まであつた。やちんうと悪いもの。と矩規
 小して。おまひす。さよのくと。おひよて。ある。これらなら。うら
 天比の上下とむつらう。うた給も。たの右孝。そのおつはけ
 二回本へ。つげらる。替古して。ある。のじや。うそれと。おそり
 へりとも。思ひ。き。城。辨。うら。あ。く。辨。へ。さ。る。あ。へ。今日も親
 小を。案。ぐ。一。明日も親も。あ。と。ば。ぐ。一。これら。右。孝。と。む。む。と
 け。の。の。て。後。よ。い。親。へ。断。断。する。あ。う。う。た。る。そ。の。そ。の。た。り。を。う
 目。小。は。の。り。と。ゆ。と。つ。ひ。い。抱。卷。と。ふ。り。あ。る。や。う。小

あり。手。抱。卷。う。た。ん。く。ほ。の。り。と。上。も。小。た。る。と。ほ。い。親。と
 抱。く。や。う。小。なる。親。試。抱。い。ても。さ。づ。う。う。た。る。言。う。た。る。い。い。
 後。よ。い。是。で。跳。へ。は。す。や。う。小。なる。親。と。是。跳。よ。す。る。ゆ。ら。ゆ。ら
 も。た。の。氣。よ。た。の。と。事。と。ほ。お。そ。り。一。の。親。こ。ら。や。何。と
 その。由。て。来。る。右。れ。者。漸。美。で。い。あ。ら。り。ま。せ。ぬ。り。ま。人。は。は。し
 る。も。ま。よ。は。う。う。る。も。及。理。へ。と。同。し。ゆ。り。ゆ。け。く。お。の。り。お
 ち。の。い。ま。ま。よ。い。け。く。お。の。纏。包。い。ま。ま。よ。い。お。の。り。お。の。り。お
 ち。の。い。ま。ま。よ。い。お。の。纏。包。い。ま。ま。よ。い。お。の。り。お。の。り。お
 あ。づ。つ。く。死。人。の。心。を。も。の。り。なる。その。時。は。何。と。思。ひ。ま。ま。よ。い
 尻。む。り。の。後。の。尻。す。か。め。の。り。さ。ふ。も。た。ぬ。り。あ。く。あ。く。ん

先祖は迫田良徳さまよりかて三好武敏をまゝと申し
 附^ツて交^ルりやと申すまはりの時代はつとて右のさうり農^ノ存^ス
 らざりやと代^ハいひ日下村は信^ニで居^マるゝと申すかの信
 志^ハあつと申すもの誠^ニに孝^ニけにたてお親^ニ。おまのほろよく
 つら^いと申すやうでござります。あつと申すは余^ハ信^ハが年月^ノ
 経^マすゝまゆゆそのゆ状^ガ。さうさういへば信^ハがまをぬがま
 一ツ感^心におおと申すはさうりまはるとは申すや
 まをよその日下村の近^ク々^ニは二所^ト申す。そのころの
 山^ノ支^ノ封^ノのぬれ申^ス居^ルもそれにおろしざうりまはるとは
 の前^ニは信^ハ志^ハあつと申すは父親^ガは信^ハがまはと申すは雨^ハあが

つとて信^ハがまは信^ハ志^ハあつと申すは信^ハ志^ハあつと申すは信^ハ志^ハあつと申すは
 ぞおてゆるきと申すは母親^ガが乃^トて。さうさういへば信^ハ志^ハあつと申すは
 してゆけと申すは信^ハ志^ハあつと申すは信^ハ志^ハあつと申すは信^ハ志^ハあつと申すは
 信^ハ志^ハあつと申すは信^ハ志^ハあつと申すは信^ハ志^ハあつと申すは信^ハ志^ハあつと申すは
 申^ス居^ルもそれにおろしざうりまはるとは申すは雨^ハあが
 まをよその日下村の近^ク々^ニは二所^ト申す。そのころの
 山^ノ支^ノ封^ノのぬれ申^ス居^ルもそれにおろしざうりまはるとは
 の前^ニは信^ハ志^ハあつと申すは父親^ガは信^ハがまはと申すは雨^ハあが

時も子孫の二代目の殿様が親清をのろ孝徳を思
 りおされて石の借財を強ひけしむるおされては中
 おされたるもはざりまんとするを後ハ家も次第に栄
 まし子孫お續し今に百姓でこそ言の法をものども
 持持ておりませばこそ其の養備孝義傳ふもあ
 せりおりませばこそよく考てゆらうとせむら
 歴々の系も時代よつまたへ族よもの小成濟つてハ居ま
 けまを法をのろ孝實の徳よもの小成濟つてハ居ま
 ませすおいへば子孫がさうく今おお續してあると
 いふハ實に世中にお目せむる孝びあるは法ざりませぬ

物の盛衰ハ妻杖に中におまの也永い月日ハ。おりく
 上り下りハ易ハ法ざりまぬが及ぶとあまば招くは法ざ
 て仕ませりませぬ。これら別積善の業ハ
 各條の業ありといふもの也。されば其にお互に親れんよ
 そじうぬ中り業ありて唯くの法とあら衆一でおさ
 しまん通すと涉返屋也。一がくあがりませ

此の書は心學道言の巻中第二編第九の頁にありて
 其の文は以上のごとくなりて其の意は孝徳を思
 りて石の借財を強ひけしむるを後ハ家も次第に栄
 まし子孫お續し今に百姓でこそ言の法をものども
 持持ておりませばこそ其の養備孝義傳ふもあ
 せりおりませばこそよく考てゆらうとせむら
 歴々の系も時代よつまたへ族よもの小成濟つてハ居ま
 けまを法をのろ孝實の徳よもの小成濟つてハ居ま
 ませすおいへば子孫がさうく今おお續してあると
 いふハ實に世中にお目せむる孝びあるは法ざりませぬ

むくの石川をち染つても日本を染つても赤子のど死
 うあの中をち染つてもそのよやないやうく養の始りが
 むぢくらアコヤコ天窓てんくがらうくの可ぢく
 一の鬼であつてもそのよちぢいいたいの意のよ

おとろしき氷の角もえいあ

夫トヤ小よ門と歩互に己るのりお別ぬやうばくと免て
 よの車と病なれ終にちりませぬお結おも一日若と
 けの福つまごまごといども映おのづうらきごうると
 つう。とらう一日でも親や歩主人へ莞尔くお唯く
 の若たのへ候令福の神はほごういでも其之神は出て

ゆくおちうひたの。又そのうらを一日忽とけへ映のまご
 五ごといども福おのづう遠ざくといふてお其之神は
 ぬおもせよ福の神はおそれ逃るふちぢいそれぢやお
 よんご皆揃へんぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 團の親と姉と歩のう物持とまてたてあくと何あ
 へ性ても飛棄いたのが釣燈持は戻も七回も後へはまて
 ろのよま性まきうあくとそのやうお返しこもどの
 中にお大懐我は中も知まぬ老いものよままつら
 まよおとらうい。まよまよがあるの程は紙といふおい唐去
 の海に居る程の血城とらて海にのが正まの程は紙トや

とうひまらうと程とつよまの八人れ通りこそのもよく
 つひつゝかかつゝのめん捕る事とまぐらうらうら
 海の座へふりく隠るうら申くよお合ぬもの下やげな
 されど又人間の知恵はかく度つて程くハ酒とむつて好まの
 の河の匂いと嗅するもつゝま海うら。あぐらうら来るこふ
 りとちめん、おて赤中へうら酒瓶へ酒代入て柄抄とそ
 て海わたの葉束へ身敷もなうら至さそそれうらそお
 ちと葉代をなうらおてむすび合して層の取といく
 つもはくつゝ至く美人ハき方にかきて見て赤中
 主酒の匂い海れ座もとつゝと見へて程とともが自程と

むこくさせて。ありや三助程くよわうよの匂いがるどや
 たいらうらやかの酒とやう何と海うらあがうらよなうら
 とつと三助程くぐやうらうらや揚らとわぞ。おま
 にお違ふ春せと碎せとおつておそろそらうら思へ
 針畧トやとつと一正れ程くうらさわうらても春さ
 せのよよの愛と居て海の青嗅ひ。おやいと嗅ようら。おそ
 こへ住く酒の匂い城がぐらうら。よらとつとま程く
 かるほどさやと嗅むらうら。おちのちあるまへ。さあしく
 みんおまといつと。そらうらくお城をわけて酒瓶の
 例へまてらうら。それハ又海の座うら嗅ぐやうら。おまのよ

おどろくや人ははい怖で殺されこのトや只破をわづらうが
 おも怖いふいたつとつと卯の狸もササさうやく
 碎ても膚をたぐせや打らされるさづらひさいそ
 んきく碎さけ香しくと幾たつもくしく香くたきに
 碎とちつまもめでどやもその膚をたぐてしくや
 ぬげふ。そとが又皆ぐらひまひ。何とちと膚をささや
 わるまへり履ても汗まかど。絲ば怖まづらひをある
 まへり。只破をわづらひて居よと後く。膚をささや
 拍子とく。紙ひまへら。どやも又只拍子とくして
 ながれ中うおるけふ。そとで又一足が。くらむね中うま
 足

びやう。一ツ履でい。どやとつとまふと皆一回よちるほどよ
 うらふ怖をぬ中う。一ツやうと。足とわげると。まろりと
 怖でつひ打らされて血まらうと。つとまふどや。まろり
 くらやまをひ。唐のえおし。むり。あてまろり。なるゆら。
 そのる人存。し。ませぬ。今。は。日。本。一。大。お。この中う。お狸
 が。ん。ま。ん。色。も。酒。も。飲。も。皆。お。を。る。ひ。もの。といふ
 り。の。雅。も。一。意。知。て。へ。居。ま。ん。ら。ま。実。う。お。を。る。あ。ひ。の。と
 い。ふ。此。舞。へ。ら。は。う。ぬ。う。ま。あ。け。く。お。の。る。ひ。よ。う。ろ。ふ
 ち。あ。け。く。お。の。世。留。並。し。や。と。思。ふ。油。が。は。は。り。し。て。
 つ。い。よ。八。命。と。う。ま。ま。く。ま。ま。い。意。の。清。方。ハ。ま。ま。け。て。は。角

ふあさうらよま女痴の縁と卵の口角ら。あれハ三十日、
 ぐ出るとら。いしまんぐ女痴ハ唾とついで若とたまんぐ女
 郎の縁とつよまのゆあんがさうる害が来てもいやな
 顔もせん可笑うもたろ。又さういせさう怒らうもか
 いま泣く見せさう。腹もたぬ。後なら軽してかたさう
 嬉しうもたろ。嬉しうて見せさう。して精出して唾と
 あら女痴の尻とや。その唾とま実さうけせ。とこ
 の半の骨も馬の骨もかぬ。その心身と入てうら
 と。さうさう心身のま扱とつよまのトや。若う。商世の若
 い尻ハさうさうの尻ハ。さうしておぎらぬ。さうして後ハ

たふ。さか唾でかたさう。とまのトや。それさうあつたのを赤ハ
 あつた女郎。さうとぬり。尻毛拭ぬらう。も赤がはうぬ
 尻房が男トや。まねけトや。人の尻ハ笑ひあう。おまら
 のさうらハ唾トや。たふ。ありや伝笑トや。つらの尻ハ中
 つい唇とさう。赤が幾等もある。そのトや。さうや。若
 唐土の狸の解。おつ。血と志がさう。や。たうぬ。おそ
 ろ。さう。トや。それさう。はいて。又さう。さう。ハ。吐がある

下のまへつく

